幻夢抄録ー目覚めー１０章

維月十夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幻夢抄録―目覚め―１０章

【Ｎコード】

Ｎ０９６８Ａ

【作者名】

維月十夜

【あらすじ】

刺客との闘いで傷ついた氷魚は、以前として昏睡のままだった。その裏で、彼女を狙った刺客・紫嵐は、主との主従関係に、軋轢を感じていた。様々な運命が、複雑に絡み合い、不協和音を醸し出す！

蒿里（こうり）へ…（前書き）

どうも、維月です。
今回は、どうも全体的にダークになってしまい、うーん…書いてて、
何か息苦しいぞ？（笑）
でも、ここからが佳境なので、どうぞ、楽しんでくださいませ♪

蒿里（こうり）へ…

ここは、どこだろう？
もう、愛しい彼（か）の人の村に、着いたのだろうか？
ふわふわ、ふわふわと、意識が漂う。
呼ばれた気が、したような、しなかったような。
「氷魚っ、なにが、一体、なにがあったんだよっ」
瑪瑙は、氷魚のベッドの脇に、突っ伏す。
その肩は、ひどく震えていた。
瀕死の氷魚を、自宅の玄関先で見つけたとき、瑪瑙は、自分の不甲斐なさを呪った。
自分など、消えて、なくなってしまえばいい。
彼女を失うより、どんなにマシか。
「氷魚…！」

彼女の傷を処置したのは、瑪瑙の、掛かりつけの医者だった。
彼は、窘（たしな）めるように、瑪瑙の肩に手を置いて言う。
「落ちつくんだ、幸いにも、傷は浅い。痕も残らないだろう。まずは、する事があるんじゃないか？今、できることをするんだ」
「…ああ、分かってる、分かってはいるんだ」
「その様子だと、多分、三、四日で気がつくだろう」
医者は、そう言うと寝室から出て行った。
ドアの閉まる音を背中に聞き、瑪瑙は、暮れ始めて赤い、黄昏の空を見あげて呟いた。
「分かってンだよ…そんなの」
（氷魚、すまねぇ…すまねぇっ！）
握りしめる掌に、爪がくい込み、床に点々と、赤い雫を落とした。

「シラン、シラン、どこです！？」

豪奢な宮殿内の、隅に位置する小さな房室(へや)に、女の甲高く、耳障りな声が響いた。
房室に窓はなく、薄暗い。
その中に、黒く、人の輪郭が浮かびあがった。
「は、奥方様…私(わたくし)はここに」
言って、顔をあげた彼女の頬が、ピシャリと鳴った。
主の平手が、強く打ち据えたからである。
「余計なことをっ、誰がアレを殺せと言いました！」
「申しわけ、申し訳ございませんっ！」
「お前はただ、命令に従っていればよい！忘れるんじゃありませんよ、お前が野垂れ死にするところを拾ってやったのは、この私だということを。お前の代わりなど、いくらでもいるのですよ、たかがお前一匹始末することなど、造作もない」
「そ、そんなっ、奥方様、私は！」
「いい訳は聞きません、時期まで、大人しく控えていなさい」
「は…はい」
「私は戻りますよ…紫嵐(しらん)、余計な動きはしないことです」
衣の裾を翻して、主が房室から出て行くのを見送り、すっかり姿が見えなくなってから、紫嵐と呼ばれた、茶髪の娘は変化を解き、元の豹の姿に戻った。
「なんで、このあたしが叱られなきゃならない…あたしはただ、役に立ちたかっただけなのに。チッ！忌々しいっ」
豹は、身軽に窓から跳んで、数メートル下の地面に着地した。

一方、氷魚は依然として、眠ったままだった。
「ホント、言ったとおりになっちまった…ったく、弱音吐いたって、始まんねぇよな、氷魚、勝手にいなくなるんじゃねぇぞ？早く俺ンとこに、戻ってこい」
瑪瑙は、彼女の傷だらけの頬を、固く絞った布で拭って言った。
氷魚が眠って、二日目の夜が、開けようとしていた。

目が覚める、と言われた三日が過ぎ、四日が過ぎても、氷魚の目は覚めなかった。
「瑪瑙、瑪瑙…起きて」
肩を揺さぶられて、瑪瑙は勢いよく、伏せていた体を起こした。
「氷魚！？よかった、大丈夫か？どこも、苦しくねぇか？」
抱き締める瑪瑙の胸を、彼女は、やんわりと押し返した。
「違うよ…瑪瑙、俺だ」
氷魚の声を借りた『何か』は、真っすぐに、瑪瑙を見て言った。
「違うって…柘榴？お前、どうして…」
「どうして、じゃないだろ？全く、お前には、氷魚がただ眠っているように見えるのか？今、どうして俺が出てきたのか、よく考えてみろよ」
「まさか、魂が…ない！？」
「身体は眠っているだけだ、魄（はく）があるからね、けど、魂のない身体は魄だけでは保てない、やがて死ぬんだ」
「氷魚が、死ぬ！？冗談じゃねぇ！柘榴っ、なにか方法はねぇのかよ！」
「瑪瑙、君を蒿里（こうり）に連れて行く…氷魚は、そこだ」
「おい、蒿里って…死者の魂が行くっていう、ど、どうやってだ！？」
「俺も、一緒に行くから大丈夫、ただ手を取ってくれればいいよ。さぁ」
「おう…」
瑪瑙は、差しだされた、白い手を強く掴んだ。

門（前書き）

氷魚の体を借りて現れたのは、今は亡き親友で、氷魚の兄でもある柘榴だった！

蒿里で、剣の師匠であった、彼女の母に氷魚を託された瑪瑙は、現世への帰還を決意するのだった。

氷魚は、一面、真っ白な砂利の上に佇んでいた。
目の前には、見たこともないような、碧(あお)く、静かな海が広がっていた。
「きれい…」
砂利は、白い石英。
柔らかな日射しに、繊細な輝きを放っている。
「戻らないのか？氷魚」
聞き覚えのある、静かな声に、氷魚はふり返った。
「お母さん！？」
「こんな場所で、会うことになるとはな…氷魚、何を迷っている？」
「え？」
氷魚は、瞠目する。
「迷っているんだろう？戻るべきか、ここに留まるか」
氷魚は、小さく頷いた。
よく考えてみると、瑪瑙の村が襲撃されたのも、兄の柘榴が死んだのも、すべて、自分が狙われていたからではなかったか。
「あたしは、お荷物なのよ…いつも『何も知らなかった』で守ってもらってばかり」
「そうか？本当に、そう思うのか？氷魚」
「どうして？」
「では、どうして今ここにいる？お前は、あいつを守ったのだろう？攻撃が、村に及ばぬようにと、戦ったのではなかったか？」
「そう、よ…だけど、だけど、もうイヤ…関係のないヒトたちまで、巻き込んでしまう！あたしなんて、いらないのよっ！このまま目も覚めなきゃいいわっ」
「そんなことを言ってはならない！氷魚、必要のない者など、ありはしない、お前は一人じゃないよ、よく周りを見るんだ。いいね、

生きなさい、どんなことがあっても」
「瑪瑙に、瑪瑙に…会いたい！」
氷魚の瞳から、大粒の涙がこぼれ落ちていく。
「そうか、アレを…愛しているんだね」
（氷魚、こんなに…魂が傷だらけになる程まで）
その時、頬にぽつり、と雫が落ちてきた。
雨、だった。
「いいタイミングだ…」
氷魚の母が言ったとき、背後で砂利が鳴った。
「氷魚…やっと、見つけた！」
そこには、ずぶ濡れで立つ瑪瑙と、柘榴がいた。
「兄さん…瑪瑙！！」
氷魚は、勢いよく瑪瑙の胸に飛びつく。
「っとぉ！たく、心配させやがってお前はぁ～」
「ごめんなさぁい…」
「やーれやれ、見せつけてくれるな…お前たち」
と、氷魚の母。
二人にその会話が聞こえるはずもなく、堂々と恥ずかしげもなく、
口づけ合う氷魚と瑪瑙。
「さあ、悠長にしてられない、早く戻らないと」
柘榴は、瑪瑙から氷魚を引き剥がして言った。
「そ、そうだ…急がねぇと、身体が持たねぇんだった！帰るぞ氷魚」
「ど、どうやって！？あたし、帰り方分かンないよ」
「大丈夫、落ちついて…俺が案内するからね」
柔らかく笑って、柘榴が言う。
「瑪瑙、氷魚を頼んだよ…どんなことがあっても、離すんじゃない、
しっかり捕まえときな」
氷魚の母は、瑪瑙と氷魚の手を取って、握り合わせてから笑った。
「分かりました、師匠（せんせい）…ありがとうございます」
「いい。早く行け、時間がないのだろう？」

「はい…氷魚、行こう」
瑪瑙は、氷魚の手を引いて歩き出す。
その先には、柘榴が微笑みながら待っていた。
「お母さん！あたし、生きるね！？」
「そうだ、それでいいんだ…幸せになれ、氷魚」
「ありがとうっ！！ありがとう…」
母の姿が、見えなくなっても泣きやまない彼女の肩を、瑪瑙は優しく抱き寄せる。
すると、氷魚は少し落ちついたのか、瑪瑙の肩あたりに頬を寄せた。
「さて、着いた。ここが『門』だよ」
柘榴の声に、顔をあげると、そこは、いつの間にか森の中だった。
森を分断する、大きな川に架かる橋の前に、三人が立っていた。
「すごーい、キレイ…ガラスの橋なんて、初めて見た」
氷魚は、橋から乗り出して、下を覗く。
川の水は、水底の色が、はっきり分かるほどに澄んでいた。
「瑪瑙、妹を…氷魚を頼むよ。君たちには、幸せになってもらいたい」
「柘榴…」
「これで安心できる、君たちなら、定めにも打ち勝つことができるだろう。さぁ行って、橋を渡れば戻れる」
「兄さん！？」
氷魚は、振り向いて兄を呼んだ。
「俺は行けないよ、氷魚。戻る体がないからね…でも、大丈夫だよ。また会えるから」
「ほんと？」
聞く、氷魚の声は涙声になっていた。
「うわわ、大丈夫だよ、本当さ、だから泣かないで…ね？」
「う、うん…」
「じゃあ、また会うその時まで、先に向こうに戻っててくれよ、な？氷魚」

「そだね、分かった…そうする、ね？瑪瑙」
「だな、そんじゃ戻っか」
「うんっ」
涙を拭って氷魚は、瑪瑙と手を繋いでから言った。
さよなら、は言わない、また、必ず会えるのだから。
二人が橋を渡りきると共に、辺りを、白くまばゆい光が包んだ。
光が治まると、柘榴は青く、どこまでも高い空を見あげる。
「俺も、戻るとするかな…」
風が、柔らかくそよぎ、彼の赤く、鮮やかな髪を揺らした。
次に風がそよいだとき、そこに、彼の姿はなかった。

「氷魚、氷魚…」
低く、優しい声が、氷魚の耳朶を擽（くすぐ）る。
「ん…」
うす目を開くと、心配そうに覗き込む、瑪瑙がいた。
「大丈夫か？傷、痛むか？」
「平気、だよ…ごめんなさい、あたし、瑪瑙に謝んなきゃね」
「んん？そりゃ、ちと違うんじゃねぇか？」
弱々しく言う彼女の頭を、くしゃり、と撫でて瑪瑙は言った。
「え？なにが…」
氷魚は、ベッドからゆっくり起きて、瑪瑙と向き合う。
「むしろ、こっちが礼を言いたい、お前…村を守ってくれたんだよな？師匠から、話聞いたぜ」
「うん…」
「ありがとな、けどなぁ…それよりも、もっと自分を大切にしろ！もう、自分一人の体じゃねぇんだよっ」
「きゃ！」
氷魚は目を閉じ、身をすくめて小さくなるが、温もりを感じて、おそるおそる目を開けた。
「め、瑪瑙？」

抱き締められていた。
氷魚は、そっと瑪瑙の髪を撫でてやる。
彼は、怒っているのではない、悲しんでいるのだと、氷魚は、心の深部で思った。
「夫婦だろ？俺たち…もっと、頼ってくれよ…なぁ氷魚」
「迷惑、かけたくなかったのよ、村も、やっと落ちついたのに」
「もういい、いいから…勝手にいなくなるんじゃねぇ、無事で、よかった。お前が、何ともなくて、よかった」
「ごめんね、ごめんなさい瑪瑙。でも…あたしたちって、まだ結婚式してないわよ？だからまだ…」
「いらん、ンな細かいことはいい。そういうことにしとけ…事実上、何ら変わりねぇんだからよ」
「まったく、もう…」
二人は、しばらく見つめてから、笑い合った。
「安心したら腹減った…何か食おう、食えるか？氷魚」
「もちろん…あたしもお腹空いちゃった、もう、何日も、何も食べてないような気がしてさ」
「同感だ…」
「あたし、何か作るよ…助けてもらいっ放しだしねっ」
「ばっ、バカっ無理すんじゃねぇっ」
「無理じゃないよー、もう元気。瑪瑙のお陰で」
「足元、ふらついてンだろお前…分かった、分ぁかったから、そんな目で見るなよ。俺も手伝うから、辛くなったら、ちゃんと言うんだぞ？」
「うん、分かったっ」
満面の笑みの彼女に、瑪瑙は、一気に赤面して、頬を掻いた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0968a/

幻夢抄録―目覚め―１０章

2010年10月11日20時58分発行